

## 北海道教育大学札幌校における大学・教職大学院と 附属札幌小・中学校・特別支援学級との共同研究および連携

高久 元・萬谷 隆一

### 1. はじめに

北海道教育大学は、東北6県をしのぐ広さの北海道内に、札幌、旭川、釧路、函館、岩見沢の5つのキャンパスを有し、北海道における教員養成の中心的役割を果たすとともに、地域の発展、活性化に寄与できる人材を養成している。北海道教育大学の附属学校園は、札幌、旭川、釧路、函館にあり、各地域のキャンパスと連携しながら、地域のモデル校としての役割を果たすべく、教育・研究に取り組んでいる。北海道教育大学札幌校は、197万人の人口を擁する札幌市内の北東にある、自然環境豊かなあいの里地区に立地しており、大学と同じ敷地内に附属札幌小学校、中学校、特別支援学級(ふじのめ学級)がある。いずれも創立、設置から長い歴史をもち、附属札幌小学校は創立から137年目、中学校は76年目、ふじのめ学級は小学校が58年目、中学校が56年目を迎える。附属学校は大学に隣接しているだけでなく、附属学校の建物が内部で廊下を介してつながっており、自由に往来できるつくりになっている。その立地、環境を生かして、教育実習等の実践の場として大学教育、教員養成へ貢献することはもちろん、大学教員や学生・大学院生との共同研究、調査の実施、小・中学校・ふじのめ学級の間での教育の連携も行われてきた。

### 2. 大学・教職大学院と附属札幌小学校との共同研究、連携

100名を超える大学1年生が、小学校で授業観察を行う基礎実習(令和5年度より学校教育の実践と省察I)は、コロナ禍の状況に応じて授業動画の配信や、少人数グループに分けての実施など工夫しながら最大限の教育実績を挙げられるように対応してきた。また、附属学校の役割の1つである学部の教育実習、教職大学院の教育実践研究実習に関しても、従来に近い形で実施し、教員志望の意欲を高められるよう努めている。教育実習に関しては、受け入れ人数の多さから、授業実践の時間数は少ないものの、行事の指導補助、実習生間での授業検討など、他校の実習では得られない経験を積んでいる。令和4年度には、大学と北海道教育委員会の連携事業「教員基礎」が始まり、教員志望の札幌市内の高校2年生約30名が附属小学校で授業観察、児童との交流、道徳の授業実践などを含む学校実習を実施した。2日間ではあったが、実習に臨む高校生の積極的な姿勢が、教員、児童にも良い刺激となっている。

共同研究では、大学教員に共同研究者として加わっていただき、指導案検討会等で助言をいただきながら、コロナ禍の中でも精力的に研究を進めている。規模の縮小はあるものの、対面で研究大会を実施できており、安全に十分配慮し工夫を施すことで対面での研究大会実施が十分可能であることを実証してきた。令和2年度後期からは、学び舎の価値を問う「学び舎の再こう(考・構・興)」を主題に研究を進め、道内外の教育関係者の方々と議論を深めながら研究の質を高めている。また、小・中・ふじのめ学級教員が一堂に会して互いの研究を理解する機会を設け、連携を強化している。

### 3. 大学・教職大学院と附属札幌中学校との共同研究、連携

まず連携については、教育実習においては、大学1年生の基礎実習(学校教育の実践と省察I)、3年生の5週間の本免実習を通して、大学の教員養成プログラムにおける実践体験を通じた教員養成に貢献している。教職大学院の実習 I・II についても、学部段階に比して理論・研究と教育実践の往還を意識して、教科指導および中学校教育全般についてより深まりのある実習プログラムを展開している。また大学の教科教育法の授業で本校の教員が実地講師として指導にかかわる機会も多く、大学の教育課程における実践面の補強をしている。最後に、教育相談でも大学からの専門家の支援を得ており、生徒の心のケアの補強が可能となってきている。

共同研究については、従来からの研究大会での助言者にとどまりがちな関わりから「共同研究者」という位置づけを大学教員に担ってもらい、より日常的な大学と附属学校との関わりを促している。また学校研究においては生徒の実態把握のための質的・量的研究を行う上で大学教員の専門的知識の供与・分析解釈で多大な助力を得ており、エビデンスベースの学校研究を進めることができた。また、学長戦略経費(令和3年～5年)により附属学校で学生の観察と省察にかかわるプログラムの改善に、大学教員と附属教員が共同して取り組んでいる。

### 4. 大学・教職大学院とふじのめ学級との共同研究、連携

ふじのめ学級では、大学1年生の基礎実習で教育現場を実際に見学、観察してもらうことから始まり、特別支援教育専攻の2年生の教育実習、4年生の教職実践演習で学び、大学生が教職を意識しながら、教員志望の思いを高められるように取り組んでいる。また、ふじのめ学級全教員が特別支援専攻の大学1年生の講義「知的障害学級経営法」を担当しており、この講義により大学生が特別支援教育の実際を知り、翌年の教育実習への見通しを立てられるようにしている。教育フィールド研究では、2年次の教育実習を終えた学生が、教育現場を更に学ぶためにふじのめ学級に通い、実践的な学びを深めている。また、ふじのめ学級体育館でふじのめ学級の児童・生徒、保護者、兄弟が、様々なスポーツ・遊びを行ったり、車椅子体験をしたりできる「みんなのあそびば」を大学と共同で企画し、活動に学生も関わることで、学生にとって児童・生徒理解を深める場となっている。このような一連の講義、実習等を経験し、学生は児童・生徒とのつながりが深まり、教員志望の学生増加に結び付いている。

研究大会では札幌校の特別支援教育専攻の教員、他キャンパス、他附属の特別支援の教員、教職大学院の教員など様々な方々の協力、助言をいただきながら、教員や参会者の方々が一緒に学ぶ研究大会を企画している。ふじのめ学級の先生方が、児童・生徒のよりよい成長を第一に考え、附属学校だからできる学校研究を大学の先生方と共同で推進している。研究成果の公立学校への還元や、コストや時間を抑えつつ効果が表れることも考えながら進めている。

共同研究では、先述の「みんなのあそびば」を活用したスポーツ・遊びのニーズ調査、発達に応じた運動プログラムの検討のための調査、ビジネス顕微鏡を用いて体育の授業における子どものコミュニケーションの様子を可視化する研究などを学部・大学院と共同で行っており、調査・研究を継続的に進めている。

## 5. おわりに

小・中学校、ふじのめ学級のいずれにおいても、教職大学院で学ぶ大学院生が、非常勤講師として授業や行事の指導補助に携わり、実践力を高めている。多くは教員採用試験に合格し、現在札幌市内、北海道内で教員として活躍しており、附属学校が実践の場として効果を上げているものと考えている。学生が大学・大学院で幅広い知識や技能、理論を学び、附属学校で実践を重ねることで、教職への思いが高まり、教員志望の学生増加へとつながるよう、今後も大学と連携していきたい。また大学の第4期中期目標・中期計画に沿って、小中の一貫した教育への取り組み、ICT活用教育等の地域のモデルとなる先導的な教育プログラムの開発、附属学校における教育実習や教員の研修の強化などを大学とともに知恵を出し合い進めていきたい。

高久 元(北海道教育大学附属札幌小学校前校長)

萬谷 隆一(北海道教育大学附属札幌中学校校長)